

エグゼクティブサマリ

第 I 部 イメージスキャナに関する調査

(1) 2017年の出荷実績

2017年のイメージスキャナの出荷実績は以下のとおりであった。

2017年 イメージスキャナ市場	台数 (前年比)	金額 (前年比)
国内出荷と輸出を合わせた総出荷	315万台 (3%増)	737億円 (±0%)
フラットベッドスキャナ	122万台 (3%減)	85億円 (6%増)
ドキュメントスキャナ	193万台 (7%増)	652億円 (±0%)

2017年のイメージスキャナの出荷実績は、台数では315万台（前年比3%増）、金額では737億円（前年横ばい）と、台数では増加という結果となった。

フラットベッドスキャナ（A3以下／50,000円以下のフラットベッド）では低価格機が減少したことにより前年比で台数3%減、金額6%増となった。主に業務で紙文書の電子化やOCRなどに使用されるドキュメントスキャナ（A3以下／50,000円以下のフラットベッドを除く）は、前年比で台数7%増、金額は横ばいとなった。

(2) 2020年までの出荷見通し

2020年 イメージスキャナ市場	台数 (2017年比)	金額 (2017年比)
国内出荷と輸出を合わせた総出荷	323万台 (2%増)	755億円 (2%増)
フラットベッドスキャナ	99万台 (19%減)	69億円 (19%減)
ドキュメントスキャナ	223万台 (16%増)	686億円 (5%増)

2020年のイメージスキャナの見通しは、台数では 323万台（2017年比2%増）、金額では755億円（同2%増）と見通した。

このうちドキュメントスキャナは、引き続き成長が見込まれ2017年と比べて台数で16%増、金額で同5%増となる見通しである。

一方、フラットベッドスキャナは、2017年と比べて台数、金額ともに19%減との見通しとなった。

第Ⅱ部 OCR 関連装置に関する調査

1. 2017年の市場規模

2017年（2017年1月から12月）のOCR市場は、金額ベースで約81億円となっており、2016年比で約17%減という結果になった。台数（本数）ベースでは、伝票処理用OCRが約2万台（本）となっており2016年比で約10%減となった。文書OCR用ソフトウェアについては、商品形態の多様化に合わせ、2017年度以降は市場動向に合わせサブスクリプション方式やクラウド方式によって販売されるソフトウェアの金額集計のみを実施することとした。よって台数（本数）は伝票処理OCRのみの集計結果となっている。2017年度台数（本数）と金額が減少した主な要因としては、デバイスタイプと伝票処理用OCR「ソフトウェアタイプ」の減少の影響によるものである。伝票処理用OCR「デバイスタイプ」は、設備導入の検討や見直しに時間がかかっているものと推測する。伝票処理用OCR「ソフトウェアタイプ」が台数（本数）ベースは2016年比で約50%増の約1万4千台だったが、金額ベースで約22%減の約12億円となっており、製品単価が低下したと推測する。文書用OCRは、金額ベースで約16%増の約5億円となった。ソリューションサービスは金額ベースで、約21億となった。

2. 2020年までの見通し

2020年のOCR市場は、台数（本数）ベースで約25万台（2017年比 約25%増）、金額ベースで約114億円（2017年比 約38%増）と見通した。タイプ別では、伝票処理用OCR「デバイスタイプ」は台数ベースで約1万5千台、金額ベースで約76億円、伝票処理用OCR「ソフトウェアタイプ」は本数ベースで約10万本、金額ベースで約12億円と見通した。

伝票処理用OCR「デバイスタイプ」は、2018年以降は、オリンピックに向けた設備投資や企業の装置リプレース需要により、増加傾向で推移すると見通した。伝票処理用OCR「ソフトウェアタイプ」は、2018年は需要が落ち着きいったん減少に転じ、2019年は、「デバイスタイプ」と共に増加し、2020年は2019年とほぼ同水準に推移する見通した。

文書OCRは2018年以降、より一層の低価格化が予想され大幅減少と見通した。また、今後は商品形態の実態に合わせ金額集計方法の検討を行う。

ソリューションサービスは、2017年以降は約24億円の水準で推移するものと見通した。